

外国語教育メディア学会
The Japan Association for Language Education and Technology (LET)

第46回 九州・沖縄支部研究大会 発表要綱

〈大会テーマ〉

思考力の高まりを目指した外国語教育のあり方について
— 一小中高大接続に寄与する言語活動の検討 —



日 時：平成 29 (2017) 年 6 月 3 日(土) 10 時 30 分～17 時 50 分

会 場：佐賀大学 本庄キャンパス 教育学部 1 号館
〒840-8502 佐賀市本庄町 1

主 催：外国語教育メディア学会(LET)九州・沖縄支部

後 援：佐賀大学教育学部，佐賀県教育委員会

外国語教育メディア学会 (LET)

第 46 回 (2017 年度) 九州・沖縄支部研究大会

研究発表要綱

2017 年 6 月 3 日 (土)

佐 賀 大 学

《 プ ロ グ ラ ム 》

- 10 : 00 ~ 受付・登録 (1階 多目的室)
- 10 : 30 ~ 11 : 40 ワークショップ (2階 104教室)
 テーマ：読むことの領域における思考力の高まりを目指した英語学習の在り方
 講師：日吉 敬子 (佐賀県教育センター)
- 11 : 00 ~ 展 示 (1階 多目的室)
- 11 : 50 ~ 12 : 20 支部評議員会 (2階 103教室)
- 12 : 30 ~ 12 : 50 開 会 式 (2階 104教室)
 総合司会：LET九州・沖縄支部副支部長 長 加奈子 (福岡大学)
 開会の挨拶：LET九州・沖縄支部長 田口 純 (筑紫女学園大学)
 会場校挨拶：佐賀大学教育学部長 田中 彰一
 挨拶：LET名誉会長 木下 正義
- 12 : 50 ~ 14 : 00 講 演 (2階 104教室)
 司 会：LET九州・沖縄支部副支部長 荒木 瑞夫 (宮崎大学)

 演 題：英語の読解・聴解など第二言語処理を支える
 認知メカニズム：実行機能 (Executive Function)
 とは何か？

 講 師：門田 修平 (関西学院大学)
- 14 : 00 ~ 14 : 20 支 部 総 会 (2階 104教室)
- 14 : 25 ~ 15 : 50 研究発表・実践報告

 第1室 (2階 101教室)
 司 会：石井 和仁 (福岡大学)
 司 会：岡田 美鈴 (北九州工業高等専門学校)
- 14 : 25 ~ 14 : 50 学内外の人的資源を利用したグローバル人材育成プログラムの開発とその成果
 佐々木 有紀 (福岡大学)
 新田 よしみ (福岡大学)
 大津 敦史 (福岡大学)
- 14 : 55 ~ 15 : 20 多読教材の選定から見える学生の英語力
 林 幸代 (福岡大学)
 丸尾 加奈子 (福岡大学)
 川瀬 義清 (西南学院大学)
 長 加奈子 (福岡大学)

15 : 25 ~ 15 : 50 韓国の英語教育におけるデジタル教科書導入の現状と課題－日本への示唆を求めて－
原 隆幸（鹿児島大学）
木下 正義（元福岡国際大学）

第2室（2階 102教室）

司 会：山内 ひさ子（福岡大学 非常勤）
司 会：麻生 雄治（長崎県立大学）

14 : 25 ~ 14 : 50 The role of working memory and corrective feedback in the gains observed in foreign language oral production during classroom interaction
Jonathan Moxon（佐賀女子短期大学）

14 : 55 ~ 15 : 20 絵本の読み聞かせ活動による語彙知識の発達
－音声・意味・文字の結びつきに与える効果について－
林 裕子（佐賀大学）

15 : 25 ~ 15 : 50 4技能を問う英語CBT入試開発に向けた取組について
早瀬 博範（佐賀大学）
江口 誠（佐賀大学）
林 裕子（佐賀大学）

16 : 00 ~ 17 : 40 シンポジウム（2階 104教室）

テーマ：思考力の高まりを目指した外国語教育のあり方について
－小中高大接続に寄与する言語活動の検討－

コーディネーター：林 裕子（佐賀大学）
パネリスト：吉田 明寛（佐賀市立本庄小学校）
日吉 敬子（佐賀県教育センター）
相島 倫子（佐賀県教育センター）

17 : 45 ~ 17 : 50 閉 会 式（2階 104教室）
第47回支部研究大会 開催校挨拶 長 加奈子（福岡大学）

18 : 00 ~ 20 : 00 情報交換会（カフェソネス2階）
司 会 大会実行委員 綱 智子（長崎県立大学 非常勤）
植田 正暢（北九州市立大学）

■ ワークショップ

▶ 10:30～11:40 (2階 104教室)

読むことの領域における思考力の高まりを目指した英語学習の在り方

— 読みのプロセスを踏まえた言語活動を通して —

講師：日吉 敬子（佐賀県教育センター）

本研究では、読むことの領域における思考力の高まりを目指して、発問による言語活動に着目した。認知処理レベルを踏まえた言語活動が、学習者の思考力を高めるであろうという仮説を立て、読みのプロセスの段階に応じた発問構成を研究した。本研究でいう思考力とは、読むことの領域において、「話の内容や書き手の意見などに対して自分の考えを述べてその理由を示すことができるよう、書かれた内容や考え方などを捉えることができる力」とする。その力が身に付いたかどうかは、書くことの領域において、「読みのプロセスを踏まえた言語活動を通して、自分の考えとその理由を書くことができた」かどうかで、最終的に判断した。読みのプロセスとは、読解の過程を3段階で捉えたもので、Pre-reading、While-reading、Post-reading からなる。それぞれの段階で思考が活性化されているかどうかは、門田・野呂（2001）による Davies（1995）が示す思考の分類法の抜粋を用いた。これを基に、読みのプロセスにおける各段階の生徒の発話やワークシートの記述及び産出した英文を分析し、各段階の発問が思考力を高めるのに有効であったかどうかを検証した。

2年計画の1年目は、研究協力校の研究員による実践・検証を基に、発問を軸とした言語活動中心の単元づくりを提案した。2年目は、同じく研究協力校の研究員による実践・検証を基に、発問に加えて、発問と組み合わせる他の手だての有効性も含めた単元づくりを提案した。このワークショップでは、研究員による実践の具体についても、演習を通して紹介する。

■ 講 演

▶ 12:50 ~ 14:00 (2階 104教室)

司会：LET九州・沖縄支部副支部長 荒木 瑞夫（宮崎大学）

英語の読解・聴解など第二言語処理を支える認知メカニズム

— 実行機能（Executive Function）とは何か？ —

講師：門田 修平（関西学院大学）

門田ほか（2014）では、シャドーイングにおける前頭連合野の活動が示唆されました。この前頭連合野には、ストラテジー使用にも関連の深い、自身の認知プロセスをモニターするメタ認知（metacognition）、および認知を支える、抑制（inhibiting）、切り替え（shifting）、更新（updating）といった実行機能（Executive Function）が関係していると考えられます。講演では、英語（第二言語）の読解・聴解など言語運用を支える、メタ認知と実行機能について、バイリンガリズムやワーキングメモリなど関連分野の研究成果をもとに、検討したいと思います。以下が主な内容構成です。

1. はじめに：シャドーイング学習法の副産物：前頭連合野の活性化
2. メタ認知と前頭連合野
3. 実行機能と前頭連合野
4. バイリンガルの言語能力と実行機能：モノリンガル vs. バイリンガル
5. おわりに：実行機能をきたえる第二言語の学習
 - (1) 多重処理状況としてのコミュニケーション
 - (2) 言語間距離の影響：近距離 vs. 遠距離
 - (3) 学習タスク：認知負荷大 vs. 負荷小

引用文献

- 門田修平・中野陽子・風井浩志・川崎真理子・氏木道人・中西弘・野呂忠司・長谷尚弥（2014）英語シャドーイングが英語読解プロセスに与える影響：近赤外分光法による脳内処理メカニズムの検討 日本認知科学会 2014 フラッシュポスター発表 名古屋：名古屋大学
- 三宮真智子（2008）メタ認知研究の背景と意義 三宮真智子（編著）『メタ認知：学習力を支える高次認知機能』, pp.1-16. 京都：北大路書房
- Suvarna, A., Bak, T. H. et al (2013). Bilingualism delays age at onset of dementia, independent of education and immigration status. *Neurology* 81: 1938-1944.
- 渡邊正孝（2008）メタ認知の神経科学的基礎 三宮真智子（編著）『メタ認知：学習力を支える高次認知機能』, pp.207-225. 京都：北大路書房
- Zhisheng, (Edward) Wen ほか編（2015）. *Working Memory in Second Language Acquisition and Processing*. Multilingual Matters.

■ 研究発表・実践報告（第1室）

▶ 14:25～15:50（2階 101教室）

司会：石井 和仁（福岡大学）

司会：岡田 美鈴（北九州工業高等専門学校）

▶ 14:25～14:50

学内外の人的資源を利用した グローバル人材育成プログラムの開発とその成果

佐々木 有紀（福岡大学）

新田 よしみ（福岡大学）

大津 敦史（福岡大学）

グローバル・コンピテンシー育成には、大学内の人的資源を横断的に利用し、不足する要素については、学外の人的資源を導入してプログラムを開発する必要がある。本発表では、私立総合大学である福岡大学の全学生を対象とするグローバル人材育成プログラム「グローバル・アクティブ・プログラム（G.A.P.）」の実践例に基づき、学部の垣根を超えた教員、留学生、職員などの学内資源を、様々な学外資源とどのように組み合わせてカリキュラムを構築しているか例を紹介し、学生のアンケート等の結果からその成果を検証する。

短期海外研修参加者を対象に渡航前の事前研修として開発されたG.A.P.講座は、「グローバル対応能力育成ワークショップ」「Interactive English」「グローバル対応能力育成ワークショップ」「TOEICワークショップ」およびe-learningによって構成され、学内の留学生をTAとして活用しているほか、地元劇団所属の役者や外部講師、学外の留学生、グローバル教育の専門企業などが参加し、研修先で必要とされるコミュニケーション能力や語学力を多角的にサポートする。また、「海外インターンシップ準備」と「海外インターンシップI」では、大学での学びとキャリア・デザインにおける海外インターンシップの意義について学内の専門家による講義を受け、学外の海外インターンシップ専門のアドバイザーとの入念なインタビューに基づき、それぞれの学生の英語力と本人の興味や専門性を考慮したインターンシップ先のマッチングを行う。また、「グローバル・メディア・リテラシー」では、毎日新聞社から現役の記者を講師として招き、現代社会の様々な問題への向き合い方と情報を読み解いて活用する力を身に付けることを目的としている。

G.A.P.科目は各科目の目的に応じた柔軟なカリキュラムが構築されている。従来の学部教育とは大きく異なるため、プログラムの「可視化」が課題であり、現在開発中のループリックとe-ナビの早期導入が必要だと考えられる。

多読教材の選定から見える学生の英語力

林 幸代 (福岡大学)

丸尾 加奈子 (福岡大学)

川瀬 義清 (西南学院大学)

長 加奈子 (福岡大学)

近年、日本の中学・高校・大学の英語教育の現場で、多読学習が注目を集めている。多読学習は、学習者自身の興味とレベルに応じた英語を大量にインプットすることで、読解力を高めるという学習法である (Day and Bamford, 1998)。本発表では、学生が実際に多読学習の一環として読んだ本についてジャンル分析を行い、学生の興味の傾向とその特徴について議論する。

本研究の対象となるのは、四年制私立大学で英語系を学ぶ 76 名である。学生は授業の課題として、授業時間外で多読学習を行うよう指示されている。本のレベルおよびジャンル等の指定はなく、自分のレベルや興味に応じて自由に本を選択できる。1 冊読み終わるごとに、MReader 上のクイズに解答し、合格すればその本の語数が積算されるという学習活動である。

学生が読んだ延べ 1,254 冊のうち、合格した冊数は 1,034 冊、不合格となった冊数は 220 冊である。レベル別の冊数および合格・不合格の別を表に示す。

表：レベル別冊数と合格状況

レベル	合格	不合格	計
レベル 0	2	0	2
レベル 1	10	1	11
レベル 2	330	52	382
レベル 3	339	73	412
レベル 4	198	45	243
レベル 5	125	38	163
レベル 6	19	7	26
レベル 7	10	4	14
レベル 8	1	0	1

多読学習開始当初は、レベルにあった本の選択が難しいようで、クイズに合格できないケースが多く見られた。しかし、学習が進み、レベルの見極めができるようになるにつれ、不合格となるケースが減少し、適切な多読学習が出来ていることが観察された。さらに、学生が読んだ本のジャンルの分析を行ったところ、普段の読書活動で学生が敬遠している文学作品や物語文の需要が高く、エッセイやノンフィクションの需要が低いという特徴が見られた。本発表では、文学作品や物語文のストーリーが、学生の英文理解の大きな手助けとなっている一方、エッセイやノンフィクションでは、学生自身がストーリーを構築していなくてはならず、学生にとっては難易度が高くなることを主張する。

参考文献

Day, R. and Bamford, J. (1998). Extensive Reading in the Second Language Classroom. Cambridge University Press.

韓国の英語教育におけるデジタル教科書導入の現状と課題

— 日本への示唆を求めて —

原 隆幸（鹿児島大学）

木下 正義（元福岡国際大学）

インターネットの普及とグローバル化の促進は、教育の分野にも影響を与えている。文部科学省によると、教育における ICT の活用の利点として、「子供たちの学習への興味・関心を高め、分かりやすい授業や子供たちの主体的・協働的な学び（いわゆる「アクティブ・ラーニング」）を実現する上で効果的であり、確かな学力の育成に資するものであること」、また「ICT を活用することによって、一人一人の子供たちの能力や特性に応じた「個別学習」や、子供たちが教え合い学び合う「協働学習」の効果的な実施が可能になること」を挙げている。

本発表では、ICT 教育、特にデジタル教科書の導入に関して進んでいる韓国の事例を考察する。特に英語教育におけるデジタル教科書導入の現状と問題点を考察し、日本への示唆を求めるものである。まず、政策面から韓国におけるデジタル教科書を捉え、2002 年にその開発及び普及中長期計画の策定を行い、2004 年に一部でプロトタイプ開発及び実験を適用し、2005 年には活用と検証を開始した。2007 年になるとデジタル教科書開発実行計画を策定し、デジタル教科書常用化推進法案を発表し、デジタル教科書のプロトタイプ開発を完了した。2008 年に、小学校 5 年生用 6 科目、6 年生用 4 科目のデジタル教科書のコンテンツ開発を完了した。2009 年には実証研究校を 112 校に拡大した。実証研究の調査結果としては主に 2 つあり、1 つはデジタル教科書の活用による学力、学習態度、自己学習能力の変化を挙げている。2 つ目の結果は、デジタル教科書活用のために教員が要求する学校のテクノロジーリーダーシップの必要性である。韓国におけるデジタル教科書の全面導入は、当初の計画より遅れているのが現状である。また、韓国釜山教育庁でのインタビューから、デジタル教科書導入にはネガティブなイメージを持っていることがわかった。

最後に、日本でデジタル教科書を導入した実績のある佐賀県の公立学校の実例と比較・考察することで、日本への示唆を得たい。

■ 研究発表・実践報告（第2室）

▶ 14:25 ~ 15:50 (2階 102教室)

司会：山内 ひさ子（福岡大学 非常勤）

司会：麻生 雄治（長崎県立大学）

▶ 14:25 ~ 14:50

The role of working memory and corrective feedback in the gains observed in foreign language oral production during classroom interaction

Jonathan Moxon（佐賀女子短期大学）

Corrective feedback (CF) plays a facilitative role in second language development (Lyster, Saito & Sato, 2013). Key to this development is the learner noticing the differences between her production and the target-like forms indicated by CF. However, the degree to which learners notice CF during interaction may be constrained by individual differences in working memory (WM) (Baddeley, 2012), due to the role that it is posited to play in the noticing of information regarding target forms contained in the CF (Robinson, 2002).

This small-scale study of Japanese college students examined: (1) the comparative effectiveness of two types of CF (recasts and elicitations) on gains made in foreign language (FL) oral production of the past progressive form; and (2) the relationship between FL gain scores and WM capacities as measured by an L1 reading span test. Two 30-minute classroom interventions were carried out on Recast (n=7) Elicitation (n=6) and Control groups (n=8). Knowledge of the target structure was measured at pre-, post- and 4-week delayed posttest using oral production tasks that provided obligatory contexts for its production.

Results showed significant gains for only the Recast group at posttest, although this advantage was not maintained in delayed posttests. WM was not found to be related to FL gain scores in either CF condition after controlling for phonological short-term memory, nonverbal reasoning and proficiency.

The differential treatment effects are discussed in light of the contrasting roles that recasts and prompts may play in the restructuring of L2 knowledge. The observed lack of association between WM and FL oral production gains is illuminated in terms of task complexity and its potential roles as a mediating factor in such associations. Pedagogical implications are also provided.

References

- Baddeley, A. (2012). Working memory: theories, models, and controversies. *Annual review of psychology*, 63, 1-29.
- Lyster, R., Saito, K., & Sato, M. (2013). Oral corrective feedback in second language classrooms. *Language teaching*, 46 (01), 1-40.
- Robinson, P. (2002). Effects of individual differences in intelligence, aptitude and working memory on adult incidental SLA. *Individual differences and instructed language learning*, 211-266.

絵本の読み聞かせ活動による語彙知識の発達

— 音声・意味・文字の結びつきに与える効果について —

林 裕子（佐賀大学）

1. はじめに

小学校英語の教科化に伴い、音声中心の体験的活動を通して「読むこと」「書くこと」への興味を育成する初期リテラシー活動が幅広く実践されるようになり、その重要性は今後増す一方である。本研究は、その中で、絵本の読み聞かせと発展学習 (extension activities) から成る児童参加型読み聞かせ活動 (interactive storybook reading) (Dockrell, Stuart & King, 2010ⁱ) に焦点を当て、語彙知識の発達に与える効果を検証する。先行研究において、小学生の英語の語彙知識に関して、「音声と文字」と「文字と意味」の結びつきの強化の必要性が指摘されていることを踏まえ（笠原・町田・長田・高梨・吉澤, 2012ⁱⁱ）、本研究では、各対象語の音声・意味・文字のつながりを測定し、児童の英語の受容語彙知識の発達について総合的に考察する。

2. 研究方法

小学校第6学年38名を対象とし、外国語活動の時間において、英語絵本 'Today is Monday' を用いた読み聞かせ活動を2回に亘り実施した。初回の授業前に音素認識能力テスト（全5問）と語彙テスト（全10問）を、2回目の授業後に語彙テストと絵本の内容理解テスト（全5問）を実施した。語彙テストは、英語音声を聴き、その文字表記（「文字欄」）とその日本語の意味（「意味欄」）を選ぶ構成になっている。

3. 結果と考察

反復測定の変数分散分析（Repeated-measures Analysis of Covariance）を行い、音素認識の影響を統制して事前と事後テストの得点を比較した結果、事後テストの総合得点（文字欄と意味欄共に正解）と意味欄の得点は有意に伸びていたが、文字欄の得点には有意差は見られなかった。次に、McNemar 検定を用いて対象語別に解析を行った結果、指導前後で正答率が有意に変化した項目は観測されなかった。

本研究では、読み聞かせ活動や、絵本の内容に基づいた発展性・継続性のあるやりとり（extended talk）を通して、まとまった文章や語彙表現を含むインプットを豊富に浴びたことにより、対象語の学習が促進されたと考えられる。しかし、文字欄の得点や語彙項目別の正答率において指導効果が顕著に表れていない点を踏まえ、今後より長期的な単元設計（4～5時間構成）を行い、受容・表現語彙の双方における音声・意味・文字の結びつきの強化について検証を進めていく必要がある。

参考文献

- i Dockrell, J. E., Stuart, M., & King, D. (2010). Supporting early oral language skills for English language learners in inner city preschool provision. *British Journal of Educational Psychology*, 80 (4), 497-515.
- ii 笠原究・町田なほみ・長田恵理・高梨庸雄・吉澤小百合（2012）. 「小学校5, 6年生の語彙知識：音声、意味、文字の結びつきに関して」『JES Journal』, 第12号, 90-101.

4 技能を問う英語 CBT 入試開発に向けた取組について

早瀬 博範 (佐賀大学)

江口 誠 (佐賀大学)

林 裕子 (佐賀大学)

「英語コミュニケーション能力の習得」という目標を達成するには、『学習指導要領』で繰り返し強調されている「4つの領域を有機的に統合した指導」は不可欠である。しかしながら、大学入試がリーディング中心であるために、なかなか『学習指導要領』の趣旨に沿った指導がなされていないという実態がある。英語教育の目標達成のためにも、さらに高大接続の観点からも、大学入試において英語の4技能を問うことが求められ、検討や試みがなされている(羽藤他, 2015)。

佐賀大学においても、入試改善に向けて様々な試みを行っているが、その1つとして CBT を活用することで4技能を統合的に測定するテストの開発を始め、入試を想定した取組を行っている。その際、以下の3つの観点を設定した。

- 1) 従来のペーパーテストでは問えなかった英語能力を統合的に問う。
- 2) 高校の『学習指導要領』に即したレベルと内容にする。
- 3) 学力の3要素「思考力、判断力、表現力」を考慮する。

そこで、大学の教員だけでなく高校の英語教員2名を加え、プロジェクトチームを結成し、プロトタイプ制作に取組んだ。Plakans (2011) が主張する「統合型評価」の利点である“real-world language use”を想定した問題づくりをした。具体的には、ビデオを見て内容を英語で書く問題、アメリカ人の学生の悩みを聞いて英語でアドバイスを話す問題、ある社会問題に関する2種類の資料を読んで、そこから見えてくる課題を英語で話す問題など8種類で、試験時間は約30分である。

目下、アドミッションセンターと協働し、出来上がった問題を iPad を使って大学生や高校生を対象にモニターテストを繰り返し、実際の入試導入を想定し問題点の洗い出しと改善を行っている。本発表では、問題作成、実施、評価・採点などの各段階でのフィードバックをもとに、4技能を問う CBT 試験の有効性と入試導入への課題を考察する。

参考文献

羽藤由美他. (2015). 「大学入試への英語スピーキング・テスト導入：CBT 方式によるパイロットテストの検証」『JACET 全国大会要項』54, 46.

Plakans, L. (2011). Integrated Assessment. Retrieved May 1, 2017, from <http://languagetesting.info/video/main.html>

■ シンポジウム

▶ 16:00 ~ 17:40 (2階 104教室)

思考力の高まりを目指した外国語教育のあり方について

— 小中高大接続に寄与する言語活動の検討 —

コーディネーター：林 裕子（佐賀大学）

今日、次期学習指導要領が目指す資質・能力の三つの柱（「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」）を踏まえた単元設計や学習・指導方法の改善・開発など、授業実践研究が幅広く実施されています。今回のシンポジウムではその中でも特に「思考力」に焦点を当て、小中高大で一貫性のある外国語教育のあり方について、佐賀県内の授業実践報告を通して理解を深めることを目指します。

パネリストには、吉田明寛先生（佐賀市立本庄小学校）、日吉敬子先生（佐賀県教育センター）、相島倫子先生（佐賀県教育センター）の3名のパネリストをお招きし、外国語教育における思考力の育成について、実践内容やその成果をご発表頂きます。言語使用の場面設定や発問構成の観点から議論を深め、児童・生徒の思考力育成に寄与する言語活動の実践について有意義な情報交換ができる機会となるよう期待しています。

▶ 16:00 ~ 17:40 (2階 104教室)

小学校外国語活動における思考力を高めるための取組

— 相手意識をもって伝え合うためには —

パネリスト：吉田 明寛（佐賀市立本庄小学校）

体験的に理解を深める活動である外国語活動において、これから学習していく英語が将来どのようなコミュニケーション場面で使われ、伝え合うことでどのようなメリットがあるのかを実感し、どのように伝え合っていけばよいのかを考える思考力を付けることがコミュニケーション能力の素地を養うことにつながると思います、以下のような取組を行った。

○ 相手意識をもって反応することができるような手だての工夫

外国語活動の中で、児童は自分のことを伝え合い、認めあい分かりあえるようなコミュニケーション活動を多く行っている。人との関わりをより実感できるようにするために、相手意識をもった態度や表情、言葉での反応を具体化した。相手の言葉に反応するためには、よく聞くことが必要になる。話す方は、反応してもらうことによりまた話したくなる。その相乗効果により、積極的にコミュニケーションをとることができる児童の育成を目指した。

まず、笑顔で話を聞くなど親和的に話を聞く態度、ジェスチャーなどを使って何とか伝えようとする態度といったベースとなる非言語的反応の向上を目指した。また、児童の非言語的反応を促す手立てとして、表情カードを提示することにより、人と関わる時に大切なことを児童に視覚的に伝えるようにした。

さらに、学年や実態に応じた簡単な英語表現を使った「つなぐ言葉」を活動の中に取り入れ、それらの活動を年間を通して繰り返し行っていた。

○ 聴く力をつける

理解できる限られた語彙数の中で、何となく分かる、全部の意味は分からなくても相手の言っていることを理解しようとする力をつける取組を行った。ALT による Today's Topic、中学生や外国人へのインタビュー動画の視聴では、児童が理解可能な話を聞かせ、聞き取れた言葉をつなげ、大体の意味を掴む活動を行った。また、絵本の読み聞かせでは、動作化を行いながら理解を促した。

○ 教室での活動をもとに実際の場面で、英語を使ってみる

年2回のALTとの個別のインタビュー(5,6年生)、修学旅行での訪日外国人へのインタビュー活動(6年生)を行った。知っている言葉でも通じたという達成感と、もっと言葉を知りたいという英語学習への意欲を感想の中で多く見ることができ、中学校以降の英語学習へのつながりをもたせることができた。

▶ 16:00 ～ 17:40 (2階 104教室)

読むことの領域における思考力の高まりを目指した英語学習の在り方

— 読みのプロセスを踏まえた言語活動を通して —

パネリスト：日吉 敬子（佐賀県教育センター）

平成23年度に開発された「佐賀メソッド」の実践が始まって、6年が経過した。佐賀県中学校教育研究会英語部会研究紀要（2012、2015）における各地区からの報告では、意欲的に表現活動に取り組む生徒の姿や英文の産出量が増えたことが成果として挙げられている。この成果につながった要因は、「佐賀メソッド」の指導過程が、村野井（2015）が示すインプットからアウトプットにつながる指導過程、①導入・提示（オーラル・イントロダクション）→②理解活動（さまざまな聴解・読解活動）→③練習（音読、発音練習）→④表現活動（英問英答、要約、ストーリー・テリング）における、特に③と④が充実していることによることが考えられる。

一方、読みの指導過程において、うまく生徒の理解を促すことができなかったり、産出された英文の内容に深まりや個性が感じられなかったりする課題があるという声も聞こえてくる。このことから、前述した指導過程でいえば、①や②の段階で困り感を抱えている英語教師が少なからず存在することが考えられる。

本研究では、これらの課題には、言語活動における認知処理に関わるのではないかと推察し、発問の内容や順番を認知処理のレベルを基に整理すれば、生徒の思考力が高まり、スムーズに意見や考えを引き出せるのではないかと考えた。したがって、本研究の指導過程は、①導入・提示、②理解活動の段階を充実させて、産出される英文の質を高めるものだと考えられる。このように、単元を通して、認知処理のレベルに基づく発問構成による言語活動を行えば、「佐賀メソッド」における表現活動がより豊かになることが期待できる。

このシンポジウムでは、教師の発問を受けての、生徒の様子を具体を紹介する。

▶ 16:00 ~ 17:40 (2階 104教室)

思考力を高めるための言語活動の工夫

— 発問構成を軸とした読解指導を通して —

パネリスト：相島 倫子（佐賀県教育センター）

今後の英語教育の改善・充実方策について、文部科学省は、「中学校・高等学校では、主体的に『話す』『書く』などを通じて互いの考えや気持ちを英語で伝え合う言語活動を展開することが重要」と提言している。

この「主体的に『話す』『書く』などを通じて互いの考えや気持ちを英語で伝え合う」力は、聞いたり読んだりしたことの事実情報を確認することに比べ、高度な認知処理レベルを必要とする。認知処理のレベルを基に発問の内容や順番を整理すれば、生徒の思考力が高まり、スムーズに意見や考えを引き出せるのではないかと考え、平成27・28年度のプロジェクトテーマを「読むことの領域における思考力の高まりを目指した英語学習の在り方」と設定し、読みの指導過程において、思考の認知処理レベルと読みのプロセス（Pre-reading、While-reading、Post-reading）の段階に応じた発問構成の研究に取り組んだ。

研究協力校における実践でも、認知処理レベルと読みの段階に合わせた発問構成を軸とした授業展開を試み、言語活動を工夫した。表現指導に至るまでの聴解や読解指導において、読みのプロセスの段階に応じた発問を行うことにより、意味内容を正確に捉えさせ、テキストの内容を正しく理解させるとともに、テキストに書かれている事実を理解させるだけでなく、テキストの主題を読み取らせ、自分とテキストのつながりを強く感じさせることをねらいとした。生徒に主体的に、さらには異なる角度からテキストを読ませることが、生徒の思考の深まりや表現の豊かさにつながったかは、評価発問への解答に表出した作文で判断した。

お知らせ・お願い

【資料代】

LET会員: 無料 / 当日会員: 1,000円 / 当日会員(学生): 500円

【情報交換会】

参加費(会員・非会員とも): 4,000円(学生半額) 参加を希望される方は、5月26日(金)までに、支部ホームページからお申し込みください。

【大会受付】

午前10:00より2階 104教室前のホールで行います。LET九州・沖縄支部への入会を希望される方は受付へ申し出てください。(個人会員・団体会員 6,000円, 学生会員 3,000円)

【事務局問合せ先】

〒818-0192 太宰府市石坂2丁目12-1 筑紫女学園大学 松崎徹研究室

TEL & FAX: 092-925-9279

Email: toru72@chikushi-u.ac.jp

支部ホームページURL: <http://www.j-let-ko.org/htdocs>

【昼食】

昼食は、学内の食堂(大学会館, カフェソネス), お近くのレストランやコンビニをご利用ください。飲食される場合は、2階リフレッシュルームをご利用下さい。

開催校へのアクセス

【大会会場】

■電車ご利用の場合

JR佐賀駅バスセンターからバスで約15分
「4番のりば」から市営バス

【4番】佐賀女子短大・高校線

(中央大通り・辻の堂・佐賀大学前経由)

【11番】佐賀大学・西与賀線

【12番】佐賀大学・東与賀線

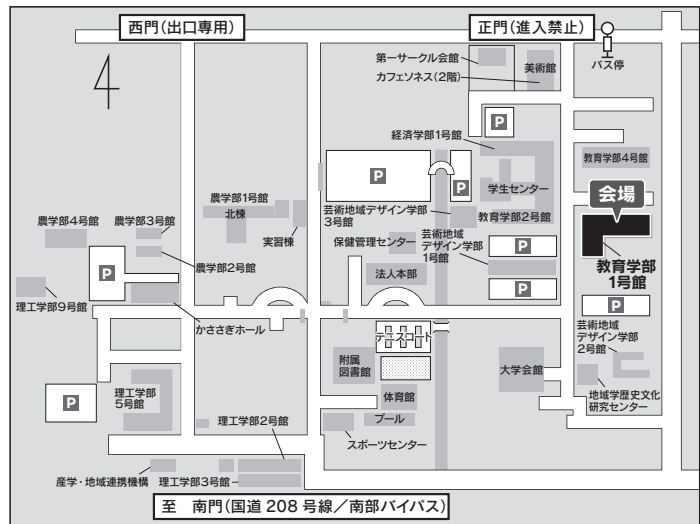
【63番】佐賀女子短大・高校線

(紡績通り・与賀町・佐賀大学前経由)で
「佐賀大学前」下車

■タクシーご利用の場合

佐賀駅からタクシーで約10分

佐賀空港からタクシーで約20分



SAGA UNIVERSITY

国立大学法人

佐賀大学

第 46 回 支部研究大会実行委員長

林 裕 子（佐賀大学）

第 46 回 支部研究大会実行委員

江 口 誠（佐賀大学）

綱 智 子（長崎県立大学 非常勤）

仲 山 雄 二（熊本県立岱志高等学校）

長 加奈子（福岡大学）

植 田 正 暢（北九州市立大学）

2017年6月1日 発行

編集・発行 外国語教育メディア学会（LET）九州・沖縄支部

代表者（代表） 田 口 純

発 行 所 外国語教育メディア学会（LET）九州・沖縄支部事務局
〒818-0192 太宰府市石坂 2 丁目 12-1
筑紫女学園大学 松崎 徹 研究室
TEL：092-925-9279 FAX：092-925-9279
E-mail：toru72@chikushi-u.ac.jp

印刷・製本 株式会社ミドリ印刷
〒812-0016 福岡市博多区博多駅南 6 丁目 17-12
TEL：092-292-0300（代） FAX：092-483-9089
E-mail：midori@midori-p.com

